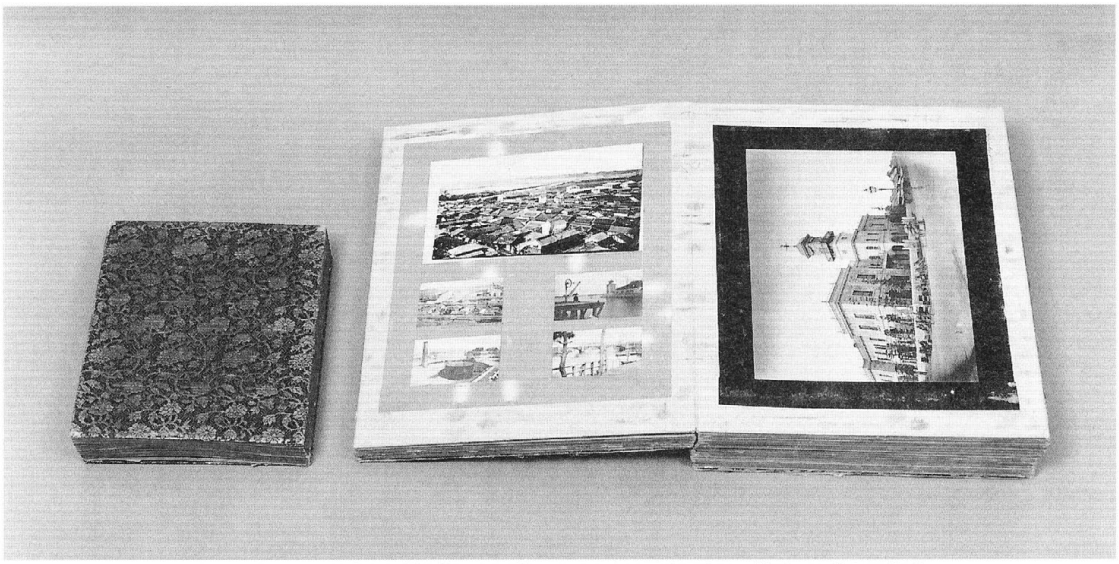
横浜開港資料館館報　YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY NEWS　第67号

開港のひろば

Number 67

編集・発行／横浜開港資料館
〒231-0021 横浜市中区日本大通3番地 電話(045)201-2100
ホームページ http://www.kaikou.city.yokohama.jp/

発行日／平成12年2月9日（水）
印　刷／中川印刷株式会社



クレットマンが日本から持ち帰った写真アルバム。見開き写真は、横浜の町並と町会所

企画展 フランス士官が見た明治のニッポン

－L.クレットマン・コレクションから－

ルイ・クレットマン
東京　明治9（1876）年撮影

明治政府は日本の近代化をすすめるにあたって、欧米各国からさまざまな分野の専門家、いわゆる「お雇い外国人」を招いて欧米のすすんだ知識や技術の導入をはかりました。軍事の分野でも同様でありルイ・クレットマン（Louis Kreitmann 一八五一～一九一四）もその一人です。

クレットマンは、明治九（一八七六）年にフランスの第二次軍事顧問団の一員として来日した陸軍工兵大尉（来日時は中尉）で、陸軍士官学校で明治一一年まで築城学や地形学を教えました。フランスは幕末から、日本陸軍の近代化のために教師団を派遣してきていました。

陸軍士官学校で教える一方、クレットマンは日本人士官らとともに『算学教程講本　代数学補』や『化学教程講本』といった基礎科目のほかに、『測地学教程講本』・『築城教程講本』・『軍路学教程講本』といった専門科目の翻訳教科書作成（明治九年刊行）にも力を注ぎました。そのほか現在の千葉県習志野市で実施されていた軍事演習にも参加し、士官学校の生徒らに測量学の実地訓練をおこなってもいます。

また本務のかたわら、東京や横浜はもちろんのこと日本各地を旅し、多くの写真を残しました。工兵士官としての視点からとらえた日本各地の風景は、これまで紹介されてきた同時代のほかの写真にはない、またべつの近代日本の姿を伝えていると同時に、記録写真としても貴重です。

このような日本での多彩な活動を物語る同コレクションは、現在、マルセイユ在住の孫、ピエール・クレットマン氏が保管されています。

今回は、多数の写真をおさめたアルバム二冊をはじめとして、旅日誌、当時のガイド・マップ、フランスの家族あて書簡、翻訳教科書、陸軍士官学校のカリキュラムや測量術の授業の際に作成したと考えられる講義録、愛用のコンパス・セット、クレットマンが軍事演習で用いたと思われる本人のフランス語のメモ書きがある「習志野原及周回邨落図」（明治八年作製）といった多彩な史料をマルセイユから借用し、展示しています。本邦初公開です。

貴重な史料の貸し出しをご快諾くださったP・クレットマン氏とそのご一族に、深く感謝いたします。

（中武香奈美）

企展画

L. クレットマン・コレクションの写真アルバムから

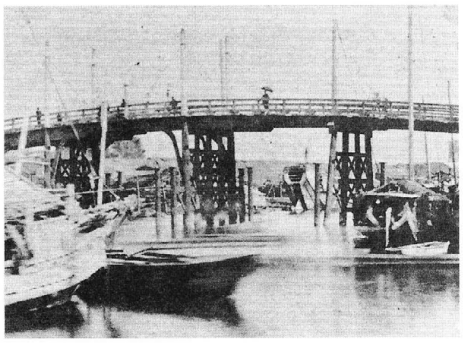
写真アルバムの中から選りすぐりの写真約一二〇点を展示しているが、その中でもさらに貴重かつめずらしい七点をつぎに紹介しよう。

大阪の可動橋、千代崎橋

明治五（一八七二）年に木津川の下流に架けられた、北堀江と松島遊郭を結ぶ木造橋である。以下の記述は、松村博『大阪の橋』（一九八七年）によった。

松島は川口居留地が設けられたことをきっかけに明治初年、市内の遊女屋、芝居小屋、料理屋などを集めて開かれたあたらしい町であった。

橋は長さ六五・四メートル、幅六・四メートル。写真からもわかるように、端部と中央部の高低差が二・九メートルもある反りの大きい橋であった。高い帆柱をもった船を通航させるための工夫で、さらに中央部の約二メートルの桁が橋軸方向に引き込まれるしかけをもつ、別名「そろばん」橋ともよばれる可動橋であった。明治一八年の大洪水で流失した。



ジェラールの肖像写真

関内や山手地区には、外国人にまつわる史跡が多い。幕末に、日本最大の外国人居留地が設けられたためである。フランス人、アルフレッド・ジェラール（一八三七～一九一五）もそのような外国人の一人である。

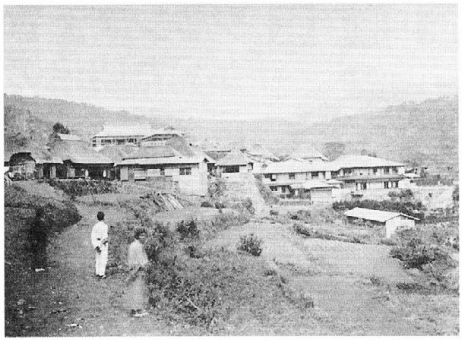
ジェラール瓦とよばれた西洋瓦とレンガの工場（現在の元町公園一帯）を経営したり、肉屋や船舶給水業なども手掛けたりと、なかなかの実業家ぶりを発揮した人物であったが、その人物像は長い間明らかでなかった。近年になり、生没年やフランスの出身地（ランス）、コレクションの存在、晩年のようすなどがわかってきた。

任期をおえたクレットマンは明治一一年五月、横浜から帰国の途に着くが、その際、ジェラールから贈られたものである。写真の裏面には、「ロウニン（浪人、武士のことか）の国の記念に」とも記されている。クレットマンは東京に住んだが、しばしば横浜に遊びに出かけており、その時に知り合ったのであろう。ジェラール、四一歳。働き盛りの堂々としたハマの実業家ぶりである。

建築中の富士屋ホテルと奈良屋

写真は外国人が好んで出かけた保養地、箱根の宮ノ下の風景である。右手に奈良屋、中央やや左手奥に富士屋ホテルが見える。近代的なホテル経営に先鞭をつけた箱根を代表する老舗ホテルとして知られる。

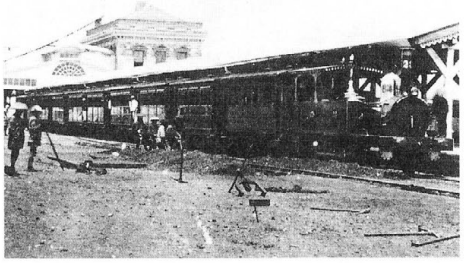
奈良屋は、当時でも江戸時代からつづく老舗旅館であった。富士屋ホテルは横浜の神風楼主山口彖蔵の養子、仙之助が、同じく老舗の藤屋旅館を買収して、明治一一（一八七八）年七月、創業したものである。クレットマン滞日時期（明治九年～一一年五月）から推測すると、写真の建物は開業を控えた明治一〇年頃の建築中の富士屋ホテルと考えられる。和洋折衷の三階建てであった。



明治二四年に竣工した本館を擁する威容はお土産用写真でしばしば見かけるが、この創業直前の写真はたいへんめずらしい。

明治九年の新橋駅構内

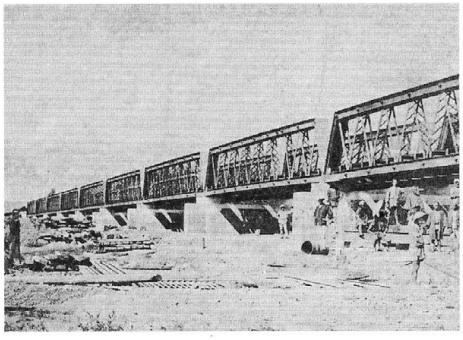
日本で最初の鉄道が新橋・横浜（現、桜木町駅）間に開業されたのが、明治五年九月（一八七二年一〇月）であった。東京と横浜は約一時間で結ばれ、クレットマンが来日した明治九年には、一日一三往復の列車が運転された。



クレットマンは列車を使ってしばしば横浜へ出かけ、買物や競馬観戦、観劇などを楽しんだことを家族あての書簡に記している。時には最終列車（午後一一時二〇分―明治九年）で東京にもどることもあったという。

なじみの新橋駅構内を写したこの写真は、列車が入線しているようすや、工夫の作業風景が写されており、

たいへんめずらしい。機関車は形式一六〇、イギリスのシャープ・スチュワート社（Sharp Stewart & Co.）製、一B形タンク機関車であろう。



工事中の桂川鉄橋

クレットマンが滞日した時期は、それまで工事が遅れていた関西の鉄道建設が、鉄道頭（のち鉄道局長）井上勝の建言で大きく前進した時期であった。明治一〇年二月、京都・神戸間が開業し、翌一一年八月には京都・大津間の工事が着工された。

写真の桂川鉄橋は、京都・大阪間で上神崎川につぐ全長三四四・四メートルの大鉄橋であった。設計はお雇い外国人でイギリス人のイングランド（J.England）が、架設はシャン（T.Shann）があたった。写真右手に工事の指揮をとるお雇い外国人らしき人物と日本人工夫らの姿が見える。

クレットマンは明治九年八月から九月にかけて、夏期休暇を利用して関西から瀬戸内海経由で長崎までの旅行を楽しんだ。その時に自分で撮影したか、入手した写真であろう。

納涼床設置中の四条大橋と南座

京都の夏の風物詩といえば写真の納涼床もそのひとつであろう。

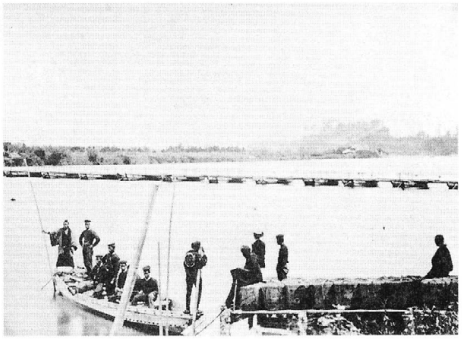
鴨川にかかる四条大橋は、明治七（一八七四）年にいち早く鉄橋に架けかえられたとされる。クレットマンが関西を旅行したのは明治九、一〇年である。写真はその時に撮影、あるいは入手したものであろう。橋のたもとと途中にガス灯風の照明柱も見える。明治初年代の四条大橋の写真はめずらしい。

橋の東詰め、写真中央には元和年間（一六一五～二四年）に始まった日本最古の劇場である南座が見える。

敷き詰められた納涼床から夏の河原の賑わいが想像されるが、明治四五年、電車路が通ることになり、二代目の四条大橋に架けかえられたが、その際に河床も改められ、納涼床も廃止となった。

江戸川に架けられた第一船橋

市川（現、千葉県市川市）を流れる江戸川に船橋（写真中央に見える）を架けているようすを写したもの。船橋とは、多くの船を並べてつなぎ、その上に板を渡して橋としたもので、



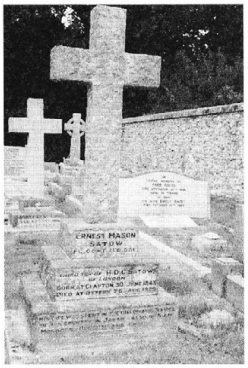
浮橋（うきはし）ともいう。その架設技術はクレットマンが専門とする工兵学の渡河技術の一つであった。

船橋架設が習志野原（現、習志野市）での定期的な軍事演習時に実施されたことが、つぎのフランスの家族あて書簡でわかる。「昨日から少なくとも来月二〇日まで私は軍事演習参加の栄誉に浴します。…ここは東京から八里ほどで、海に近く、船橋付近の江戸湾北岸に沿っています。到着するためには二つの大きな川を渡らねばなりません。この川には通常、渡し船しかありませんが、演習の期間は日本人工兵隊が船で橋を架けます」（明治九年一〇月二〇日付）。

今回の展示を準備するにあたり、クレットマンが残した写真の内容が多岐にわたっているため、各分野の専門の方々に種々ご教示いただいた。とくに老川慶喜（立教大学）、柳生悦子（日本風俗史学会）、鈴木淳（東京大学）、堀勇良（文化庁）の各氏からは鉄道・軍事・建築などの分野に関する貴重なご教示をいただいた。またP・オルシニ（慶応大学大学院生）、清水智子（横浜近世史研究会）の両氏にはフランスからの史料借用と史料の日本語訳にご協力いただいた。ここにお名前を記して深く感謝申し上げます。（中武香奈美）

前駐日イギリス大使ライトご夫妻、サトウの墓参り

昨年、任期をおえてイギリスに帰国されたライトご夫妻が、オタリー・セント・メリーのアーネスト・サトウの墓を訪ねられた。ご夫妻は、一昨年、当館で開催した「アーネスト・サトウ　その時代と生涯」展にご来場くださり、また昨年春には、イギリス大使館でサトウの足跡を偲ぶ催しを開催された。写真は武田澄江氏と有吉暉子氏提供。



ご夫妻撮影のサトウの墓

展示余話

明治資料蒐集雑談　特別寄稿　稲生典太郎

『ある外交史家のコレクション―稲生典太郎文庫』と銘打たれた今次の展示は、専門分野などなにもない素人の私には面映い限りで、外交史家とは誠に恐れ入りました。その所え集書のテーマを樹たてた経緯と蒐集の苦心談を一席との御要望には、ほとほと困却致す次第です。とりあえず、雑談という所で。

戦前、学生時代に多少集めていた藏書は東京の澁谷で戦災にあい、すべて灰になり、悲観しておりましたが、戦後、久しく中断されていた古本の展示即賣会――所謂古書展が復活したと聞いて、早速出掛けて見ますと、中学生の時分から顔見知りの老主人から『やあ、大きくなったねえ』と聲を掛けられ、この時ばかりは本当に蘇生の思いが致しました。私も何か主題を立てて勉強し始めねばと考え、戦前から昵懇の和島誠一氏に勧められるまま、歴研の発表会に行ってみると、同君をはじめ会場の壇上に居並らぶ委員方は、コッペパンをぱくつきながら盛んに談笑しておられ、一般聽講者は薩摩芋をポソポソという休憩時間であったのは、未だに印象に残っています。ともあれ、日本近代史のメインテーマの一つは自由民権研究にあることは見当がつきました。明治時代の民権論者は、民権論を主張したことは勿論ですが、他方では一種の國権論である條約改正論や内地雑居論を大いに論じております。古書展の棚にも関連資料が散見しています。図書館にはなるべく頼りたくないという偏見の持主は、身銭を切ってでも、これらの資料を自分の机の上に並べてみようと決心しました。これが大体、昭和二十四年の春頃です。

中央大学の田村幸策先生の國際法・外交史の御講義は数年に渉って拝聽し、國際政治学会の日本外交史部会にも出席を許され（当時は出席者限定制でした）、また、名著『條約改正史』の著者山本茂先生、『旧條約下における開市開港の研究』で学位を取られた大山梓氏、各地における居留地の中での外國人の実態を研究中の今井庄次氏などの知遇を得て、御教示に与る所が多大でありました。特に山本先生からは、お手持ちの資料を隨分澤山頂戴致しました。しかしながら、資料と申すものは、集め出すと切りがなく、つぎつぎと妖しき姿をもって立ち現れますが、当方の軍資金には限りがあります。今だからあけすけに白状しますが、本任校の研究費と兼任校の俸給は、すべて資料購入に注ぎ込みましたが、勿論足りません。つまる所は、家人に四十余年の火の車生活の強制という事にあいなりました。ここに哀れをとどめましたのは、定年退職時の学長招宴に、夫人同伴とあっても、着て行く物がないという始末。これには時に當って愕然としましたが、あとの祭り。思えば申訳ないことをしたものと、反省しきりの昨今であります。

稲生文庫の資料を熱心に見入る見学者

閑話休題。明治資料の専門店であった明治堂の三橋猛雄老主人の「明治物は何が飛び出して来るか判りませんよ」の一句は、正に探書の要諦。『演説』という雑誌は、当時大流行の政治演説会の演説速記が賣り物ですが、興奮した聽衆のノオ〳〵・ヒヤ〳〵から野次の聲まで記録してあり、又、別の雑誌の某医師の言う所では、爆裂弾の破裂音らしき車轟音が聽えて、何事ならんと驚いている所え、大隈外務大臣負傷の手当依頼の急使がとび込んで来たとあります。これらはまさに現在のニュース映画やテレビ中継そこのけのリアルさでありませんか。つい〳〵、集書にも力がはいろうというものです。入手した多数の資料は、一應全部、編年的に配列しておき、テーマを樹てては、数冊ずつ取り出して精讀しました。その結果、かなり細かい経緯が究明されたり、諸説あったものが歸一したり、從来殆んど不明であった事情が立ちあがって来たりしました。述べて作られずとの聖人の訓えを守り、出来るだけ根本資料に遡り、事実の忠実な復元に焦点を絞って、十編ほど文章を作成しました。紀要論文に過ぎないと冷笑に附してくれた昔馴染みもおりましたが、岩橋小弥太先生からは「近代史の論文としては、よく註が付いている」とのお墨付を頂戴し、石田幹之助先生からは「達意の文章になっている」との過褒のお言葉を頂いたのは、一代の光榮。手前味噌はこの位に致し、また、展示以外の資料にも言及したいものが若干ありますが、それもここでは省略に從います。今度、館に納った書物は全部で何冊になるのかは判りませんが、館の斎藤多喜夫氏が拙宅に見えて、軽トラック五台分位搬出されたものが基調になっておる筈です。物置きにはまだ同分量位残っております故、選び出せば多少はお役に立ちそうなものもありませう。お暇の時にお出掛け下さい。それにしても、無我夢中で集めた資料が、散りもせずに一括して然るべき所に納まり、目録も作ってもらい、展示会も開いてもらえるとは、一個人のコレクションとしては冥利に盡きる話と申すべきで、それに私の苗字を冠した文庫名まで付けて頂いたとは、誠に以って忸怩たるものがあります。又、本文中にお名前を挙げさせて頂いた先生方とは悉く幽明境を異にしておりまして、世紀末年の臘月の下旬、私一人寂然たるものがあります。

（平成十一年十二月十一日記）

資料
よもやま話1

絵葉書にみる百年前の風景

日本で絵葉書が誕生したのは、今から百年ほど前のことである。明治三三年（一九〇〇）九月一日の郵便規則によって私製葉書の製作と使用が認められたことがきっかけとなった。それ以前にも官製葉書に絵を付していた可能性もあるが、絵葉書が大量につくられたのは明治三三年以降のことである。その後、万国郵便連合加盟二五周年記念絵葉書や日露戦争記念絵葉書の流行で、絵葉書ブームが到来する。

横浜の絵葉書製造元としては、トンボヤ、上田写真版合資会社、星野屋などが有名である。当時の絵葉書の多くはコロタイプ印刷されたモノクロ写真に一枚一枚手彩色を施したものである。そのためこちらの葉書では茶色の建物が、あちらの葉書では緑色といった場合もあるが、手仕事ならではの暖かみが感じられる。

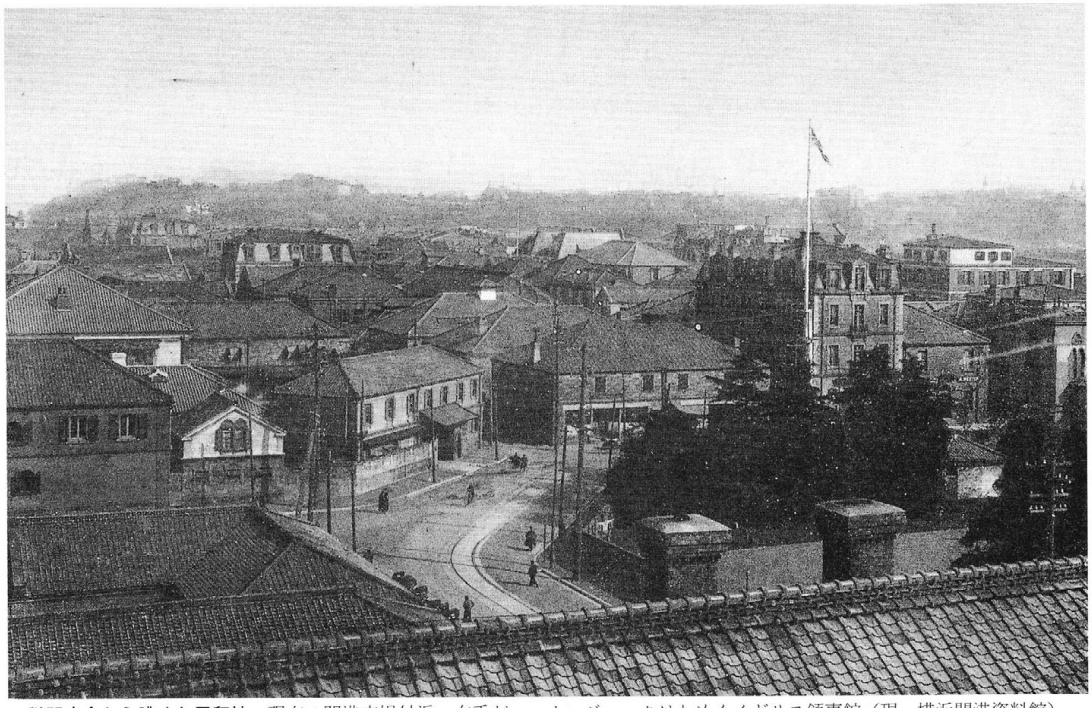
絵葉書の絵柄には、風景・美人・花鳥・演芸などがあるが、風景絵葉書は小さな長方形の紙に景色を切りとったものと言える。それをその地を訪れた者が土産物として求めたり、遠くの親戚への便りとして使う。そうした絵葉書が現在に伝わり、貴重な歴史資料となっている。現在の私たちは、絵葉書一枚一枚に切り取られた景色をつなぎあわせて、当時の横浜の街の景観を再現しようとしている。

横浜開港資料館ではさきごろ『一〇〇前の横浜・神奈川―絵葉書でみる風景』（横浜開港資料館編・有隣堂発行）を刊行した。同書には県下の様々な機関・個人のご協力を得て、一二〇〇枚におよぶ風景絵葉書を収録した。

その中の一枚をここに紹介したい。これは横浜税関の塔から山手の丘を望んだ一枚である。税関の塔は横浜の街を見渡す絶好の撮影地点で、そこから海側の桟橋や港を眺めた構図、街側の日本大通りを眺めた構図など多くの絵葉書がある。これはその中でも珍しい一枚で、現在の開港広場付近が写っている。

右手手前、税関の屋根瓦の向こうに英国領事館の門柱が見え、その付近に現在横浜開港資料館が建っている。領事館の敷地内で木が茂り、ユニオンジャックがはためくあたりは、現在の開港広場である。さて領事館の左手、通りに面して門を開き、倉庫や社屋の並ぶ一角が、居留地一番地のジャーディン・マセソン商会である。現在のシルク・センターの場所にあたる。その右隣、水町通りをはさんだ二階建ての建物も同商会の倉庫である。そしてその隣、ちょうど旗の後に見えるのが、W. N. ライト夫妻の経営するライト・ホテルである。なかなか瀟洒な建物だが、一八九五年一一月、フランス人建築家ポール・サルダの設計で新築されたものである。現在は山下町SSKビルが所在する。当時の建物は関東大震災ですべて倒壊してしまったが、わずかに当館がその頃の面影を伝えている。

（伊藤泉美）



税関庁舎から眺めた居留地　現在の開港広場付近。右手がユニオンジャックはためくイギリス領事館（現・横浜開港資料館）

資料
よもやま話2

龍の舞う街
—横浜中華街・二つの世紀末—

昨年一九九九年は横浜開港一四〇年と居留地撤廃一〇〇年目の年にあたった。これはまた、開港当時から横浜に暮らした華僑が歩んだ歳月でもある。今年二〇〇〇年は干支では辰年にあたる。古来中国人は四つの神獣—青龍、朱雀、百虎、玄武のなかでも、龍を最も尊びまた愛好し、中国皇帝の象徴としてあがめてきた。現在の横浜中華街でも、街を歩けば様々な形の龍の飾りが目を楽しませ、春節・国慶節・双十節などの祝い事には龍舞が披露される。

今回は辰年にちなんで、龍が舞う街、横浜中華街の二つの世紀末の状況について概観したい。

一八九九年—居留地撤廃と華僑

一八九九年は変化の年であった。この年の七月、日本の不平等条約の一つの現われであった居留地が撤廃された（完全実施は八月）。これにともないこれまで居留地の中に居住・経済活動を限定されてきた外国人が、日本中どこででも生活できるようになる、「内地雑居」が実施された。この内地雑居の実施にあたっては、さまざまな観点から賛否両論が唱えられ、国を挙げての議論が展開された。その中でも、中国人に対して内地雑居を許可するか否かは、日本と中国との条約上の問題とも絡んで、居留地撤廃の直前まで結論がでなかった。

一八七一年の日清修好条規では、双方が領事裁判権を承認しあっていたため、日本が西洋諸国との条約を改正した場合に、清国との条約を改正しなければ、イギリスなどがこれに均霑し、再び領事裁判権を設ける口実となるおそれがあった。そのため、西洋諸国との条約を改正する際には、清国にも条約改正に同意させねばならなかった。しかし、日清戦争における日本の勝利とその後の下関講和条約に基づき、日本は中国国内での領事裁判権を一方的に有することになったので、新条約の実施と同時に中国人に内地雑居を許可しなければならない条約上の根拠はなかった。そのためこの問題はさまざまな議論を呼んだ。

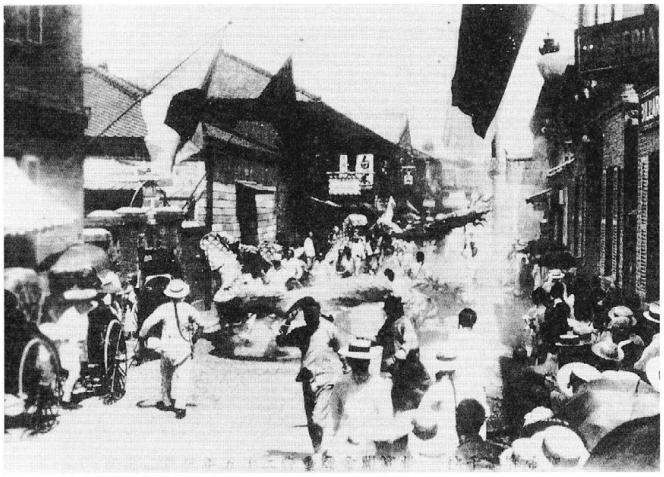


図1　関帝廟改修25周年祭で関帝廟通りを練り歩く龍舞
1910年7月。右手手前は山下町133番地のインペリアル・ホテル

中国人の内地雑居に関しては、社会的な風俗衛生等の観点から雑居に反対する意見があった。また低廉な労働力の流入につながり、日本の労働者の雇用の機会を脅かすといった反対意見も唱えられた。一方では、隣邦の中国人に対してのみ内地開放を制限するのは国際交誼上、外交上の信義にもとるとして欧米人同様の内地雑居に賛成する意見もあった。

そうした中、横浜をはじめ函館、長崎、神戸在住の華僑たちは日本の政府や言論界に、中国人にも欧米人同様の内地雑居許可を請願した。その結果、居留地撤廃直前に勅令第三五二号いわゆる内地雑居令とその施行細則として内務省令第四二号が公布された。施行細則により「農業漁業鉱業土木建築製造運搬挽車沖仕業等その他の雑役に関する労働に従事する者」は、行政官庁の許可がなければ、旧居留地・雑居地以外での居住営業等は許可されないことになった。この勅令と内務省令は中国人の日本国内への入国それ自体を制限するものではないが、狭い旧居留地・雑居地の中で農業・漁業、鉱業などを営むことは実質的に不可能であり、これは日本華僑の経済活動の範囲を制限するものであり、事実上中国人労働者の日本への進出に大きな壁を築いた。そして、今日においても日本政府は基本的に外国人の未熟練労働を認めておらず、これが外国人労働者の不法滞在などの問題を引き起こしているのである。

百年前の内地雑居令の公布は、日本の華僑社会の経済活動を制限するものとして大きな意味を持ち、その後の日本華僑の職業は居留地時代よりも狭まれた職種の、料理・理髪・洋裁業などへと集中していくのである。

横浜華商会議所の設立

ただし当時の華僑はこうした日本政府の中国人内地雑居に対する処置に、おおむね歓迎の意を表している。それは日本政府の処置は、日本における華僑の商業活動に足かせをはめるものではなく、また未熟練労働者層の入国は、商人層を中心とする当時の華僑社会にとっても自らの社会の信用と基盤を損なうものととらえられたと考えられる。その意味では内地雑居令に示された日本政府の判断は、当時の日本華僑の利害をそこなうものではなかったのであろう。

さらに、内地雑居という新時代に対応するため、横浜華僑は華僑同士の団結と日本人との提携という二つの方向を志向した。そのあらわれの

図2　双十節での龍舞
1959年10月10日
広瀬始親氏撮影

図3　春節祭での龍獅団の舞
1999年2月21日
葉袋勝代氏撮影

一つが横浜華商会議所の設立である。横浜華商会議所は世界で最初に設立された海外における中国人の商業会議所である。会所式は一八九九年八月四日、居留地撤廃の当日に行われた。式典には犬養毅、大倉喜八郎など日本の政財界の要人を招いて中華会館で盛大におこなわれた（『横浜貿易新聞』明治三二年八月五日）。演説の中で盧榮彬（ろえいひん）会長は、「今日は商業競争の時代であり、中国が世界各国との商業競争の勝者となるには、人力の結集、商学の研究、商情の観察が必要である。内地雑居以後は、大いに日本の商法・民法の研究と日本人との交流をはかるべきである。これらを成し遂げるために、横浜華商会議所が設立された」と述べた（『清議報』第二四冊、光緒二五年七月一一日「記横浜華商会議所開会事」）。

居留地撤廃以後は、全ての外国商人の活動は日本法規のもとにおかれ、また日本内地の市場を開拓しようと、外商間の競争も激化する。横浜華商会議所の設立はこうした内地雑居時代にむけて、既存の経済的基盤を維持・発展させようとする横浜華僑社会の対応であった。

一九九九年―華僑社会の新しい動き

時は流れ、現在日本の華僑社会はまた一つ変化の時代を迎えている。華僑社会の内部では、その人口の急激な増加と「華僑」とは一言では表現できない、在日中国人・中国系人社会の多様化が進んでいる。また彼らをめぐる環境、特に日本の経済的状況は、様々な規制緩和・金融自由化など流動化が進行している。

日本に暮らす中国人の人口は一九八〇年代以降急速に増加した。これは、一九七九年に中国が改革・開放路線に転じて以降、中国から多くの人々が海外に出、その一波が日本にも押し寄せたことによる。横浜市内の中国人人口の伸びを見ても、一九八〇年代中頃からの増加が著しい。それまで一二〇年あまりの間、最大で六〇〇〇人前後であった横浜在住中国人人口が、一九八六年から九〇年まで毎年一〇〇〇人づつの増加をみ、九一年には一万人を越えた。この時期はまた日本のいわゆるバブル経済の時期にあたり、日本経済が多くの外国人労働者を必要とした時期でもあった。

一般に一九七九年以降、海外にやってきた中国人を「新華僑」（New Comer）と呼び、それ以前に海外に居住していた華僑を「老華僑」（Old Comer）と呼んでいる。その新華僑が横浜でも急増したのである。市内の中国人人口を居住区別にみても、一九五二年では在住中国人四、二一三人のうち、七七％にあたる三、二六二人が中区に居住していたのに対し、一九九七年には在住中国人一三、二六四人のうち、中区に居住しているのは三三％の四、二〇四人に過ぎない（曽徳深「覚書　横浜華僑・華人の戦後史研究」『華僑華人史研究の現在』汲古書院、一九九九年）。全国規模で見ても、九九年現在、日本に外国人登録している中国人二七万余のうち、老華僑はわずか三万人、留学生は七万、新華僑は一七万にのぼる。このように日本の華僑社会は新華僑と呼ばれる人々が多数を占めるようになり、新たな局面を迎えている。

こうした状況を反映して、一九九九年九月に日本中華総商会が設立された。前述の通り、一八九九年、世界で最初の海外における中国人商業会議所が横浜に誕生した。そのちょうど百年後に、日本中華総商会が設立された。これは横浜華商会議所の設立以後、神戸、長崎、函館など日本の各地に設立された華僑の総商会の中で中国を支持する総商会の全国組織であるとともに、老華僑、新華僑、中国が出資する企業の三者によって設立されたという特色をもつ。日本中華総商会はこれまで関係の薄かった三者の力をあわせ、日本の経済発展への寄与と、世界各地の華人組織との連携強化を目的としている。新華僑の多くは日本の大学を卒業し、ハイテク、バイオ、コンピュータ関連分野などでの高い技術と技能を有しているが、日本での基盤は弱い。そこで、経験と基盤のある老華僑と、資本力のある中国系企業の三者がそれぞれの特徴を出しあって、変動していく日本経済の中で確固たる位置をきづこうとしているのである。初代会長には前横浜華僑総会会長の呂行雄（こうゆう）氏が就任した。

一方、日本中華総商会設立の動きに触発されて、留日華僑連合総会が昨年五月に設立された。これまで日本各地の中国系の華僑総会については、留日華僑代表者会議という意見交換の場はあったが、それぞれ別個の存在であった。相互の関係をより強固にし、華僑社会全体としての意志決定・行動の場とするため連合組織を設立したのである。

新世紀にむけて

二つの世紀末、ともに横浜の華僑は、華僑社会内部の団結と外部との関係強化をめざして、経済団体の設立という共通する動向を示した。しかし、横浜の華僑社会は一四〇年の歴史をへて、そこに暮らす華僑たちも、その文化的背景、中国人として意識、故郷とのつながり、経済的基盤などが多様化している。この点が百年前の状況と大きく異なる点である。この状況をどのように受け止め、横浜華僑の歴史と文化を後世に伝えていくかは現在の中華街を支えている人々の課題でもあり、またそこに集う日本人に与えられた課題でもある。二〇〇〇年二月五日・六日は旧暦の元旦・二日にあたる。横浜中華街では春節が賑やかに祝われ、今年もこの街に龍が舞う。（伊藤泉美）

閲覧室から

旧家に残された新聞・雑誌4

今回も、前回に引き続き教育関係雑誌の中から商業学校関係の雑誌を紹介します。請求番号を〔 〕で示しましたので、ご覧ください。

『会報』（Y校同窓会、進交会発行）

横浜商法学校は、明治一五年、生糸売込商小野光景はじめ横浜貿易商組合員二八人の主唱により、商家の子弟に対し商業上の実務教育を行なう目的で設置された。初代校長には、慶応義塾出身の美沢進が就任し、横浜町会所の二階に仮教室を設け授業を開始した。その後、北仲通六丁目に移転し、現在の南太田町（南区南太田町）にいたる。

また、同校は明治二一年に横浜商業学校と改称、明治二五年には本町外十三ケ町立となる。そしてこの年、校章に当時の横浜を代表する学校として、横浜の頭文字「Y」をもちいることとした。その後大正六年には、横浜市立横浜商業学校と改称し、昭和二三年には、現在の横浜市立横浜商業高等学校となった。

美沢校長は、人格の完成は誠にあるとし、誠の実践を説いた。さらに、教科に修身・学術・衛生の科目をもうけ、知徳体の全てを兼備した商業従事者を養成しようとした。明治一九年の第一期卒業生には、ジャーナリスト富田源太郎ら三人がおり、その後経済哲学者の左右田喜一郎、登山家で文学者の小島烏水など多くの著名人を輩出している。

同校の同窓会は、明治三〇年頃より組織的な活動を始め、昭和一四年に社団法人進交会となる。この雑誌は同窓会の会報で、学校や卒業生の動向を伝えている。

昭和五年八月発行の六号をみると、大正一二年に亡くなった美沢校長を懐かしむ記事がいくつかあり、現在高校野球で有名な同校だが、明治時代も校長が学問に加えてスポーツを奨励していた様子がわかる。「母校便り」にも運動部消息をのせている。また、「雑録」には、美沢先生記念進会の大会で、時事新報記者の伊藤正徳が「ロンドン軍縮会議に就いて」という講演をしたこと、故左右田喜一郎の遺稿出版、墓碑建設の報告などが記されている。次の七号には、進交倶楽部設立の記事があり、八号以降は「倶楽部便り」欄がもうけられ、晩餐会、俳句会などの報告がなされている。そして、一四号には、「Y校創立五十周年記念祝賀会について」の記事が載っている。また、昭和一三年三月発行の三一号からは、表紙に「戦線便り」号と記され、次第に戦時色が濃くなっていった。

当館では、次の各号が見られる。六号（昭和五年八月）・八号（昭和六年二月）・一四号（昭和七年八月）以上港北区椎橋忠男家文書〔雑誌No.2060-No.2062〕七号（昭和五年一一月）―四〇号（昭和一七年三月）雑誌扱（欠号多数）〔ZW／72〕

四回にわたって旧家に残された教育関係雑誌を紹介しました。これからも資料を充実させていきたいと思いますので、情報をお寄せください。

（上田由美）

資料館だより

▼展示

(1)「フランス士官が見た明治のニッポン―L. クレットマン・コレクションから―」2/9(水)～4/30(日)

(2)「世代を越えて―受け継がれた歴史の記憶」（仮称） 5/3(水)～7/30(日)

旧家の蔵などに代々受け継がれ、寄贈や寄託を受けて現在は当館が収蔵している資料をとおして、横浜の歴史を振り返ります。

▼講座

平成11年度 後期講座

テーマ：**100年前の日本と横浜を考える**

・日時 平成12年3月4・11・18・25日・4月1日のいずれも土曜日、午後2時から（1時30分開場、2時開講） 4時まで

・会場 横浜開港資料館・講堂

・講師 （横浜開港資料館調査研究員）及び講座名（開講順） 西川武臣「港都横浜の発展と幕末・明治の農民群像」、中武香奈美「フランス士官が見た明治のニッポン」、佐藤孝「一地方名望家の明治時代―『佐久間権蔵日記』を読む②―」、伊藤泉美「横浜華僑社会―2つの世紀末」、松本洋幸「『横浜市史稿』の成立」

・受講料 全5回で2,500円

手さげときんちゃく（写真上）を発売

当館所蔵の日本茶の商標をデザインしたもので手さげは1,200円、きんちゃくは大が900円、小は550円（いずれも本体価格）、新館1F受付でお求めください。

・募集人員 80人（多数の場合抽選）

・応募方法 **往復ハガキに住所、氏名、電話番号を明記のうえ2月24日までに、〒231-0021 横浜市中区日本大通3 横浜開港資料館講座係へ（TEL 201-2100）**

▼寄贈資料

(1)〔雇用契約書〕**佐助とデュポンシェル 1870年6月10日付 ほか** 6点（保土ケ谷区西久保町 黒澤一枝氏）

(2)「**レストラン メニュー・コレクション**」425点（青葉区市が尾 長澤信雄氏）

(3) **図書「Pinneo's primary grammar of the English language, for beginners.」ほか** 3点（大阪市北区 多田敏捷氏）

(4)「**明治末年横浜野毛界隈景観」 八木一郎画 水彩 昭和52年制作** 1点（鶴見区佃野町 八木ツル氏）

(5) **八木一郎肖像写真ほか** 2点（東京都墨田区 熊谷弘一氏）

(6) **山手111番館（旧ラフィン邸）設計図** 7点（中区豆口台 新井聖員氏）

(7) **周布家旧蔵資料** 420点（鎌倉市鎌倉山 加藤晴夫氏）

(8)「**東京朝日新聞」13740号付録 復興記念号（大正13年9月1日刊）ほか** 8点（南区中島町 五味きみ子氏）

休館日のお知らせ

月曜日および3月21日(火)、5月2日(火)。なお、閲覧室は、2月29日(火)～3月3日(金)、3月31日(金)も資料整理のため休室させていただきます。